資料１
南極地域観測統合推進本部
第46回観測・設営計画委員会
R3.10.11

# 南極地域観測統合推進本部

# 第４５回観測・設営計画委員会議事の記録

１．日　時：令和3年6月24日（木）15:00～17:00

２．場　所：オンライン開催（※文部科学省　研究開発局１会議室）

３．出席者：

（委員）

石川　尚人　　国立大学法人 富山大学都市デザイン学部地球システム科学科 教授

江淵　直人　　国立大学法人　北海道大学低温科学研究所　教授

神沢　博　　国立大学法人　名古屋大学　名誉教授

神田　穣太　　国立大学法人　東京海洋大学副学長・学術研究院長　学術研究院海洋環境学部門教授

坂野井　和代　駒澤大学総合教育研究部　教授

都留　康子　　上智大学　総合グローバル学部　教授

松岡　彩子　　国立研究開発法人　京都大学理学研究科附属　地磁気世界資料解析センター長・教授(欠席)

道田　豊　　国立大学法人東京大学大気海洋研究所附属国際連携研究センター　教授

山口 一　　国立大学法人 東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授

横山　広美　　国立大学法人 東京大学国際高等研究所　カブリ数物連携宇宙研究機構 教授

横山　祐典　国立大学法人東京大学大気海洋研究所高解像度環境解析研究センター教授

（オブザーバー）

小島　脩平　　国土地理院企画部　国際課長

小川　豊　　気象庁大気海洋部環境・海洋気象課　南極観測事務室長

鐘尾 誠　　海上保安庁海洋情報部沿岸調査課 課長補佐

五十嵐　壮雄　総務省国際戦略局技術政策課　専門職

津川　卓也　　国立研究開発法人情報通信研究機構　電磁波研究所電磁波伝搬研究センター宇宙環境研究室長

前野　英生　　国立研究開発法人情報通信研究機構電磁波研究所宇宙環境研究室 嘱託

岩崎　敦志　　外務省国際協力局地球環境課上席専門官

（外務省国際協力局地球環境課課長補佐代理）

市塚　友香　　環境省自然環境局自然環境計画課専門官（欠席）

中村　卓司　　国立極地研究所 所長

野木　義史　　国立極地研究所　総括副所長

伊村　智　　国立極地研究所　副所長

榎本　浩之　　国立極地研究所　副所長

橋田　元　　第 62 次南極地域観測隊隊長（兼夏隊長）

青山　雄一　　第 61 次南極地域観測隊副隊長（兼越冬隊長）

金子　宗一郎　　第 62 次南極地域観測隊副隊長（兼夏副隊長）

牛尾　収輝　　第 63 次南極地域観測隊隊長（兼夏隊長）

澤柿　教伸　　第 63 次南極地域観測隊副隊長（兼越冬隊長）

（事務局）

大土井　智　　文部科学省研究開発局海洋地球課長

吉野　明　　文部科学省　研究開発局　海洋地球課　極域科学企画官

小野寺　多映子　文部科学省　研究開発局　海洋地球課　課長補佐

４．議　事：

（１）　事務局より、当日の議題・配布資料について確認があった。

（２）　以下の議題について、報告及び審議がなされた。

《報告事項》

1. 観測・設営計画委員会について

2. 第６１次越冬隊・第６２次観測隊の活動報告及び現況について

3. 令和３年度南極地域観測事業予算の概要について

《審議事項》

4. 新型コロナウイルス感染症の状況下における第６３次南極地域観測に関する基本的な

考え方及び対応方針（案）等について

5. 第６４次南極地域観測計画の概要（素案）等について

6. 南極条約第７条５に基づく事前通告のための電子情報交換システム（ＥＩＥＳ）（案）について

7. 南極地域観測第Ｘ期６か年計画（１次案）について

主な意見は次のとおり。

**（議題４）**

【山口委員】　ワクチン接種について確認させて頂きたい。「接種することが望ましいが」というのは、隊員個々の判断に任せるということか。

【吉野海洋地球課極域科学企画官】　南極観測に関して、隊員の方々をまとめてワクチンを接種していただく機会を設けることは、こちらのほうとしては今考えていないということ。

【山口委員】　私が関与している北極観測で、秋に海外の砕氷船に日本人学者が数人乗れるのだが、上船の条件が PCR 検査とワクチン接種両方である。これはまだ文書化していないが、全員に対してそれを課すから、それができなかったら乗船ができないと言われている。日本のワクチン接種の遅れで、間に合うのかと非常にドキドキしている。ほかの人に内々で聞いてみても、「やっぱり PCR とワクチンはセットでないと、これからは安心できない」という答えが返ってくる。しかも今回、何か月も隔離されたグループで、南極観測事業という非常に大変な事業に専念してもらう中で、彼はワクチンを打っていない、彼は打っている、ということで不仲になったらいけないだろう。大きな事業に専念できる環境を整えてあげるのが我々陸上部隊の責任ではないかと考える。最大限努力して、全員が事前にワクチン接種できるように計らっていただきたいと思う。

【横山（祐）委員】　帰りにオーストラリアに寄ると、そこから飛行機で帰る可能性を挙げられていると思う。「はやぶさ 2」のときは、２週間完全隔離ということがあった。オーストラリアのボーダーコントロールはかなり厳しいと思う。大学の交換留学も、来年の２月の新学期は全て中止というのが早々にオーストラリアもニュージーランドも連絡が来ている。2 週間隔離のリクエストがある場合にどのような対応をするべきか、見通しを考えておいたほうがいいのではないかなと思うが、そのあたりの議論はいかが。

【野木国立極地研究所総括副所長】　　現状で、往路はフリーマントルに寄るが、燃料補給のための寄港なので、最初から隊員は乗っていく。帰路のところで降りて航空機で帰れるかどうかというところが一つ見極めどころだと思う。今のところトランジットだと七十何時間以内にはオーストラリアからは出られるようだが、日本国内でレギュレーションがある。2 週間あると、「しらせ」で国内に戻って昨年度の実績ではそのまま下船できるということになる。できれば飛行機を使ってとは考えているが、そのまま船で日本まで戻ってくるというオプションも含めて今現在検討中。帰ってすぐまた隔離となると、拘束期間が増えるため、船と拘束期間が一緒になり非常に問題になる。それよりは確実に船で戻したほうがいいということも議論しながら、航空機で帰す方向はまだ模索しているという状態。

【横山（祐）委員】　　それでいいと思うが、拘束期間は短いほうがいいと思う。現状、オーストラリア側の現場から話を聞いても、かなり厳しそうだという感触があったため、情報を共有させていただいた。例えばワクチンを持っていき、南極から帰ってくる前に打つというのは可能性としてはないだろうか。それならオーストラリアに入れ可能性もあるのではないかと考える。

【野木国立極地研究所総括副所長】　　越冬隊員にワクチン接種は、向こうで副反応が起こったときに対処できないため、今回はワクチンを持ち込んで越冬隊員に接種するということはしない方向で考えている。

【道田委員】　　文科省からの説明の中で、当初計画に対して何％という数字があったが、どういう計算をした数字なのか。

【野木国立極地研究所総括副所長】　　綿密にはできないためざっくりとやっている。例えば研究観測と基本観測を最初に 50％、50％にする。その中で研究項目が何項目かあって、その項目の中でもどれぐらいできるかというところで、例えば 50％とか、そういう形で積算していくと、今回はこれで現在 89％という計算になる。

【道田委員】　　計算のベースになっているのは観測項目ということか。物資の量や行動日数ではなく、観測がどう実施されたか、それが指標になっているという理解でよろしいか。

【野木国立極地研究所総括副所長】　　はい。観測がどれぐらい実施できるかというところがベースになっている。

【横山（祐）委員】　　24 と 25 ページの航路について伺う。航路の違いで、帰りは当初は

いつものとおりシドニーに入るということで、途中、観測点があったが、今回スキップする可能性が高いということで、例えばオーストラリアとか、そのほかの国との調整は行っているか。

【野木国立極地研究所総括副所長】　150 度ラインの調整は現在していない。150 度ラインは比較的新しいラインだったため、Ⅸ期その他、その前の段階でも 150 度はスキップした場合もある。110 度のほうが非常に重要なラインなので、そちらを重視するというのと、今後のⅩ期を考えると、トッテン氷河の観測をポイントとして中心に据えたい。この継続性も考え、遠回りになって、日数もかなりロスするため、150 度ラインは今回実施しないという方向で考えている。

【神沢委員】　23 ページに DROMLAN のことが出てくるが、DROMLAN はもうかなりエスタブリッシュされて、安定的にオペレーションが行われていると捉えてよろしいか。

【野木国立極地研究所総括副所長】　昨年度、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、かなり便数が減って 3 分の 1 程度になったが、安定にオペレートできている。今年度は特にアクティビティーを上げる方向に進んでいるため、安定した航空網の提供が可能だと考えている。

（議題 5）

【江淵主査】　64 次もフリーマントル往復、フリーマントル経由というのは、コロナの影響を考えてということか。それとも、海洋観測、トッテン沖の観測などを積極的に、シップタイムを割こうということで、あえてシドニー回りを割愛したという判断なのか。

【野木国立極地研究所総括副所長】　Ⅹ期に関しては、トッテン氷河沖の観測を十分に行いたいということと、南極圏の行動日数を確保するためにフリーマントル寄港を基本として考えていきたい。

【江淵主査】　そうすると、これからもシドニーに戻ることはない、150 度ラインをしばらく休むということになるか。

【野木国立極地研究所総括副所長】　フリーマントル寄港で基本考えて、110 度のラインを注力してしっかりと守っていきたいと考えている。

【横山（祐）委員】　トッテン沖重点観測はとても良いと思うが、150 度のほうは、オ

ーストラリアの新しい船、砕氷船も含めて、リサーチベッセルのインベスティゲーターというのがある。この1月からも3か月間その近辺に行くので、調整をされて、これまでのデータの引継ぎなど、情報交換をやったほうが良いのではないかと思った。

【野木国立極地研究所総括副所長】　　インベスティゲーターはかなりプロポーザルベースなので、どこまでコミットできるか分からないが、ヌイーナのほうはまだ、その辺りの情報を含めながら、連携とか取れる部分は取っていきたいと思う。

**（議題7）**

【道田委員】　　今年から国連海洋科学の10年というのが10年計画で始まっている。それと併せて、食糧農業機関（FAO）と、国連環境計画（UNEP）が中核となって立ち上げた、国連生態系回復の10年というのが今年から始まって10年間続くと、そういう国際的な環境及び海洋に関する社会情勢があって、このことが、科学のみならず、世界の政治レベルにも知られる段階に来ている。具体的には、先月、G7サミットがあったが、そのときに気候・環境大臣会合が併せて行われており、先ほど申し上げている二つの10年、すなわち、国連海洋科学の10年、それから国連生態系回復の10年が数か所リファーされている。そういう状況になっているので、ちょうど今度のX期の期間は両10年にぴったり重なる。従って、少なくともそれに対する貢献という視点が我が国の南極観測にもあってしかるべきではないかと思う

【吉野海洋地球課極域科学企画官】　　御意見として賜る。

【横山（広）委員】　　社会との協働あるいは対話という意味では、今年が国連の海洋科学の10年の1年目であるということは、社会的にメッセージを伝えるのにいい機会だと思っている。そのことを活用しながら発信に努められると良いと思う。

【江淵主査】　　この件、来週の本部総会までに盛り込めるか。それとも、1次案はこれとして、秋の最終案に向けて改訂を加えるということにするか。

【吉野海洋地球課極域科学企画官】　　来週の30日の総会に向けては、この原案のままで諮り、秋の最終決定までの間に修文の検討をさせていただく。

（3）事務局から次回の会議日程については、委員の都合を確認の上、連絡する旨の説明があった。

— 了 —